

そうだつせん
増毛との争奪戦(※42)

C·S·マークは増毛の港湾も調査をし、漁港としては認めていますが、留萌に期待した商港としての可能性は否定しています。

しかし、マークが調査した明治20年(1887)頃、留萌は戸数300戸、人口800人でしたが、増毛は戸数800戸、人口が4,700人で郡役所、警察署、郵便局、弁才船(※43)が入る良い港があり、天塩地方で経済・行政の中心でした。

当時の増毛の人たちは、「なぜ増毛ではなく、留萌に港を作るのか」と疑問に思った人が多かったと思われます。

※42 争奪戦

争って奪い合うこと。

※43 弁才船

江戸時代から明治時代まで使われた日本の船の形。北前船ともいう。

また、この頃はできたての政党の対立も激しくなり、
留萌には与党の政友会、増毛には憲政党などの野党がつ
き、国会で大論争となりました。そんな中、億太郎は明治
37年(1904)の第2回北海道会(※44)議員選挙に立候補し、
当選します。当時の北海道長官園田安賢や、後に道會議
員から代議士になる東武などと親交を深めたのでした。



北海道会議員時代(前列右から五番目が億太郎)

※44 北海道会
現在の北海道議会。

にちろ ろんそう
日露戦争(※45)が始まつたことなどで増毛との論争も一
おさ てしおえんがん そくりょう
時は納まりましたが、戦争が終わると、天塩沿岸で測量
かいぐんすいろぶ そくりょうかん むさし
(※46)にあたつていた海軍水路部(※47)の測量艦「武藏」が
きこう ゆうし かんちょう せつとく
増毛に寄港した時、増毛の有志が艦長を説得し、国会へ
せいがんしょ ゆうり かいぐん
の請願書に「増毛を有利とする理由」という海軍の意見
ていしゆつ
書をつけて提出しました。

にちろ かんたい やぶ と
増毛に、日露戦争でバルチック艦隊を破つた飛ぶ鳥を
いきお ていこくかいぐん
落とす勢い(※48)の帝国海軍が味方についたのです。

※45 日露戦争

明治37年（1904）から明治38年（1905）までの日本とロシアとの戦争。

※46 測量

かいづ かけい きろく
地図や海図を作るために地形をはかって記録すること。

※47 海軍水路部

かいぎょく かいぐん いちまかん
海図を作るための海軍の一機関。

※48 飛ぶ鳥を落とす勢い

いきお
空を飛ぶ鳥をも落としてしまうくらい勢いのすごいこと。

増毛の勢いはさらに増し、留萌にとっては衝撃的(※49)なダメージとなったのでした。

しかし、億太郎たち留萌の有志は帝国議会に証人として、港湾土木学会の権威で東京帝國大学教授になっていた広井勇工学博士を送り込み、留萌が港を作る場所として有利なことを学問的に応援させ、明治39年(1906)の第23回帝国議会で衆議院を通過させますが、貴族院(※50)で否決(※51)されました。

※49 衝撃的

心を強く動かされるさま。

※50 貴族院

大日本帝国議会は貴族院と衆議院の二院制をとっていた。
貴族院は選挙ではなく、天皇の任命によった。

※51 否決

国会などで法律案などを認めないこと。

そこで、明治40年（1907）8月、当時政友会の実力者
で、内務大臣（※52）の原敬（後の総理大臣）が北海道に來
た時に、留萌に呼び、現地を視察してもらいました。

億太郎は、小樽まで自分の船「三省丸」で原敬の一行
を迎えに行き、一度増毛に上陸して増毛町有志で開いた
歓迎会で昼食をとった後、再び乗船し、1時間ほどで留
萌に着きました。

小舟に移り、汽船に引っ張られて留萌川を1里（※53）余り
さかのぼって視察した後、園田商会（※54）に宿泊しました。

※52 内務大臣

戦前の旧内務省を率いた國務大臣。

※53 里

尺貫法による長さの単位。1里=約3.9km。

※54 園田商会

留萌川の南岸河口部に位置し、栖原漁業部から三井漁業部となり、
園田商会へと移り変わってきた。

みずのれんたろう あだちけんぞう せい
その時に一緒にきたのは、水野鍊太郎・安達謙三（政
じか ひろいいさむ ていこく きょうじゅ かわしまじゅん あんないやく
治家）、広井勇（東京帝国大学教授）、河島醇（案内役
じょうちょうかん ありしましたけお まつえい
北海道庁長官）ほか 13 名で、有島武郎（「カインの末裔」
などと知られる小説家）もその中にいました。



はら 原 敬



ひろい 広井 勇

はらたかし

原敬は、その日の日記に次のように書いています。

きぞくいん
「増毛・留萌は貴族院で問題となって、留萌の港作りの予
算は否決された。これは、がんこ(※55)で新しいものを受け
入れない人たちが、ただ感情的に私に嫌がらせをしてい
るだけだ。どちらが良いか悪いかははっきりしていて、増
わん
毛湾は悪いところはないが、内陸との連絡が難しく、鉄
せつち
道を設置することも難しい。そうすれば、留萌は増毛よ
り数段優れている。」

はらたかし

原敬の心の中では、すでに留萌に港を建設することを
決めていたと思われます。

※55 頑固

かたくなで、なかなか考え方を変えないこと。



はらたかし いっこう
留萌に着いた原 敬の一行

明治 43 年 (1910)、留萌の築港請願から足かけ 20 年、
やっと留萌築港が帝国議会で可決され、翌年から工事が
始まりました。

いよいよ工事
が始まるMO～！

